

木の墓標を建てよやつた。

後で聞くと、何でも小使奴が狐に宛がう筈の牛乳を自分達で飲んで了つて、餓殺したのだといふ話で、痛憤慨した連中もあつた。

其時分に教師をしてゐられた彼の有名な小泉八雲先生を訪ふた時、「君方が狐を退治したといふがいつぞや学校の傍で郵便配達夫を魅したといのは其奴だつたらう」といつて笑はれたが、先生も實は孤兒院に一兩何といふ義捐金を惠まれた慈善家の一人であつた。

チヨト忘れてゐたが、土管一個の破損料として大枚五十錢といふ大金を學校から徴收されたのである。

補 充 時 代

江 楠 五 生

余が補充時代に實は二十年前である。二十年と云へば丁度二世紀の五分の一で所謂ふた昔である。維新前いさ知らず、日進月歩の今日に於ては、二十年と云へば誠に隔世の感がする。其頃は本科の外に豫科が一、二、三級、豫科補充科が一、二級有つてまづ中學校の格であつた。併し入學試験は減法に難かしくて、英の譯解や書取など殊に準備を要した。其爲めに當時余田司馬人氏の經營して居られた有進校といふ豫備學は非常な繁昌であつた。自分は濟々齋の二年生から入學試験に應じたが、一級には通らずに最下級の補充二級に通つた。大方百名許りの受験者中、一級に許された者は僅かに二名で、即ち四年前までこの教授して居られた高木敏雄君と、熊本地方裁判所檢事で在職中死なれた飯盛歡太郎君とであつた。受験場は瑞

館。受験用紙は今日同様學校から渡つたものだが、受験料などは一文も取られなかつた。此の補充二級は明治二十五年より募集が止み、翌二十六年より一級生の入學も停止せられ、二十八年の七月限にて豫科三級が廢せられ、二十九年の七月を以て豫科は全く無くなつた。さうして在來の豫科一級生は新制度の本科一年生となつた。其間に中學校とは既に連絡が附いて、中學卒業生の中、優等の者は本科一年に、普通の者は豫科一級に、孰れも無試験入學を許されつゝあつた。吾輩も濟々疊に居たらば多分優等生のバツネを貰つたらうのに、一年損をした譯だ。

さて余が入學當時明治廿三年七月の校長は平山太郎先生で、教頭は櫻井房記先生であつた。教授には右の櫻井先生を筆頭として秋月胤永、中川久知、賀來熊次郎、戸澤鼎の諸先生が居られた。平山校長は美髯麗顏風采人に勝れ頗る徳望のあつた御方で、行軍の時など生徒を勞はれて居た温容が今猶髣髴として忍ばれる。然るに惜い哉翌二十四年六月八日に長逝せられた。年はまだ四十位であつたと思ふ。その一周忌の祭典は花岡山の廣きで行はれたが、去る七月二十二日鐵嶺丸と共に朝鮮近海の藻屑となられた文學士和木貞君の哀悼の演説の如きは實に三百有餘の生徒をして思はず歎せしめた。余も補充生總代として祭文をふるひ、讀んだことを記憶して居る。本誌第八號參照櫻井先生からは其頃迄はまだ教を受けなかつたが、言動明哲の譽れと、家庭に於ける愛情が餘程濃かであると言ふ評判とで屬目してゐた。秋月先生こそ名高き韋軒先生で長らく舍監を兼ね、二十八年に本校を去り、卅年か卅一年かに東京で卒去せられた。二十六年五月古稀の壽筵の時本誌第十號參照七の詩歌文章を集めたのが鎮西餘響で、送別の時のを集めたのが山高水長集といつてともに非賣品である。先生の受持は倫理であつた。倫理と云つても無論倫理學ではない。好んで論語を講じ、答案にはいつも字解と大意と餘論とを

求められたものだ。先生は大の一部好きで、大工や左官になつててどうするものかと、二部の大手腕を振ふ方面の學科でないことを常に説かれた。實際其頃は一部が最も優勢で、文科なども今日とは全く反對に、志望者が随分多かつた。そうして農科に入る者は愚劣視されて少々恥しい氣味であつた。中川先生は今熊本の農事試験場の技師を勤めて居らるゝが、豊後の竹田舊藩主の御息子ださうで、一度國會議員になられた事もある。今の一部一年丙組の教場が先生の特別室で動植物の標本が所狭きまで並んでゐた。其向うの二部三年乙組の教場が元は博物教場で階段がついてゐたが、かして随分と先生から鍛はれた。小試験といふので、學期に二回も三回も「不意に『今日は試験をします』と宣告しつゝ強いて臨時試験を行ひ、白紙を出す者の多ければ多い程、先生御得意の御相好、若し豫期に反して良好の點を得る者多ければ、先生家に歸りて焼酒を極らるゝこと正に一升との噂さも立つた位であつた。お顔色が黒く光つてゐるので金佛さん／＼と蔭口を言つてゐた馬鹿もあつたけれども、皆が先生の専門の學に熱注せらるゝには驚嘆し、且つ尊敬してゐた。今は第三高等學校教授なる賀來先生からもデル、デス、デム、デンで屢々觀感を買うたことがある。先生はオートムフットを異様に發音せられてゲイラーなどもゲョーテー／＼と常に正されてゐた。戸澤先生は何處かの中學校長であつたが今は全く消息を聞かぬ。先生は英語の文典が御自慢で、丸や四角の中に品詞を入れて、極分り易くシンタックスを説かれてゐた。

助教授には矢津昌永先生が居られた。先生はこの尋常師範の出身で、我等が教はれる時分はOttomをコトドンと發音して、コトドン先生の綽號を取られたこともあつたが、今は東京高師の教授で地理學の大家である。尤も其頃から形容詞の使用には甚だ巧熟せられてゐて貿易風の説明、西比利亞鐵道の價值論など氣焰五

丈、我等衷心愉快を感じて傾聴してゐた。囑托には大瀬甚太郎、杉山岩三郎、今井恒郎などの諸先生が居られて、三先生共に二十四年の三月には教授になられた。杉山先生は今と少しも違はず、醇々として倦まざる風の君子であつた。「阿蘇の峯より」の紀念式の歌其他十數首の佳什を作られたる園先生も初めは囑托でゐられたが矢張二十四年の三月に助教授となられた。係結の規則などは此先生から十二分に仕込まれた。警諭編輯が上手で、今も我等舊友間の話頭には往々上る所である。杉山先生の外に數學の教師で菱田爲吉といふ會員が居られたが、此人には色々いたづらをする者があつた。腰掛の上に白墨の粉を一配に蒔いて置いたり、入口の戸の上に墨板消をそつとばめて置いて落しがけうとしたり、眞に無邪氣であつた。誰であつたが、トランプの側で餘り騒いで、煙筒の繼目の所をした、か損じて、損害賠償をした者もあつた。是れより少し後で御赴任になつた福井掬とか何とかいつた漢文の先生をも大分困らせて居つた。姓名を呼ばるゝ時何き「ア」と聞ゆる故、ザー先生と花名を與へ、「誰ぞ」を讀み」と指名せらるれば其人立つて「文章軌範卷一目錄篇々」今高等工業學校に居らるゝ林鶴松氏や余田庶務長なども、又英語界一方の驍將佐久間信恭先生の如きも當時は同じく雇員であつて佐久間先生は二十四年八月教授に上られ、林氏は二十四年四月に依願免官となつた。

平山校長の卒去後二月ばかり櫻井教頭が校長心得をして居られたが、廿四年の八月に嘉納校長が見わて、爾來体育が大に興り、就中柔道部が頗に隆盛を加へた。嘉納校長の股肱で犬倉増次郎、今は本田と改姓して東京高師の教授であるが、此先生が斯道の先達として、且は柔道部長として、最も努められてゐた。余も

年余りは人真似をして、蜻蛉返りなどして見たが、首の骨の折れさうに痛く感じたからよした。そうして専ら剣道を勵んば。出帆をシュツポとよんで皮肉に冷笑されたこともあり、旁々此先生には面映くて堪らなかつた。

先生のことを彼是いふのは却つて罪だから今度は生徒側に就て少し話さう。其頃迄は人数が少く且つ年が随分違つてゐたから、上級生は下級生を弟の如く愛し、下級生は上級生を兄の如く敬つてゐた。行軍の時などは鐵砲を擔いで呉れたり、落伍者を助けて慰めて呉れたりする上級生があれば、一方に於て親爺の如き年長者を湯槽の中で胴上げして戯れ楽しむ下級生があつた。龍田山上に一升徳利と竹輪や蜜柑を携へ行いて、杉の落葉で酒を沸かして、所謂兄弟同志が飲んでゐたときの津々たる趣味は迪も今の娛樂室裡の蒸菓子黨が想像し得る所ではない。二十三年度の最上級生は本科一年生で今の二高教授武藤虎太、秋田縣事務官藤本充安、東京高師教授佐藤傳藏、向うの高工教授川口虎雄、三池炭坑技師不波熊雄、それから奉天の總領事であつた故加藤本四郎君などであつた。豫科一級生が今の文學博士黒板勝美、朝鮮拓殖會社理事林市藏、檢事安住時太郎、農商務省技師木下彌八郎、内務省書記官中原典太、同參事官小橋一太、東筑中學校長吉田豊、王學十梅野實君など。豫科二級生が當地の辯護士古閑又五郎、文士白河鯉洋、朝鮮總督府の隈本繁吉、當縣廳の伊藤龍吉、濟々蠻教諭松崎基礎、日本火山灰會社專務取締役堀貞、及び故和本貞君など。豫科三級生が今の東京大學助教村川堅吾、六高教授秋月胤繼、故韋軒先生の養子なり、筑前方城炭坑技師岡田岩藏、岩手縣小岩井大農場主事赤星陸治(舊姓下山)、廣島縣忠海中學校長江口俊博、愛知縣岡崎中學校長大塚末雄君など。そうして補充一級生が去る十月進水した戰艦河内の進水主任官を勤めた野中造船少監名は、季雄、當師團の大軍醫島

崎龍一、第一師團の砲兵少佐青木正章、臺灣總督府事務官賀來佐賀太郎、北海道釧路萬澤病院長萬澤晋、文學士高木敏雄、工學士野尻狂介、同渡邊斷雄、同栗原唯喜、それから當地錦城學館長矢澤喜太郎君などであつた。われ／＼最下級生即ち補充二級生は三組に別れて、甲組が三十一名、乙組が三十九名、丙組が三十五名、都合百〇五名あつたが、色々な事情で半途退學者が非常に多く、大學まで進んだのは僅かに貳拾壹名、それも相前後して三年前に漸く學士になつた人さへある。又たその二十一名中に大學在學中死亡した人が二人（大食家の故を以てパチエロルオブイーチングの稱目を貰うてゐた上田繁一君と女性的な人で龜さん龜さんと始終輕蔑せられて居つた本田龜男君）あるから實は學士になつた人は左の十九名である。

甲組だつた人、法學士土屋治厚、同田崎蘇一、同中村精一陸軍一、等主計、工學士石坂二郎、文學士長岡恒喜、農學士有働良夫農商務省技師で先月留學した。

乙組だつた人、法學士中村厚次郎郵便貯金、管理局、同井島義雄當地の辯護士、同甲斐群藏高工、講師、同竹添一熊當地の裁判所、醫學士古川象姫歸。病院長

丙組だつた人、法學士楠田義任當地の辯護士、同野口三九郎、同南里猷一福岡地方裁判所判事、文學士小林吉人北京法政學堂教習、同木下四郎一山形縣新莊、中學校教諭、工學士加賀本長之助、日本橋小百、鐵山會社、同中島章海軍造、兵少監、及びかく申す某である。

序でに學資を一言するが其頃と今とは丸で比較にならぬ。授業料所謂月謝は豫科が一圓五十錢本科か二圓、これは今と大差はないが、食料入浴料共一圓五十錢乃至二圓、炭油費五錢、交際費といつても芋、煎餅、はすんだ所で龍南堂の饅頭、土通町の開化餅、親睦會には賄喜三郎の仕出したる牛肉入の豆腐の糟、竹輪に蜜柑に辛蓮根にノツペを位、卒業生の送別會が加茂川牛肉店にて三十錢出しが最上等、書籍は大抵學校から元價の五

十分の一にて貸渡してゐたから右の月謝共一ヶ月四圓五十錢乃至五圓で十分であつた。我々の卒業した年明治卅年でさへ、下宿料は參圓參拾錢が中等で、間料などは無論なかつたから他は推して知るべしだ。校則上今と違つてゐる二三を云へば、其頃は行狀點といふものがあつて甲乙丙丁で表はし、丁に當る者は學科成績の如何に係はらず落第したものだ。又た追試業があつて病氣其他の事故ある者は次學年の始に受けてよかつた。但、二十點減點といふ前觸れであつた。今の組長は其頃は世話掛といつて総務より指名依頼してゐたが、二十九年十月組總代と改稱して選舉制となり、被選者に會長から依頼することとなつた。寄宿舎には室長の外に室長補があり、矢張生徒の投票であつた。門鑑とつて自分の名札を外出する時に門衛の所に置き、歸る時取つて舎監室に懸け居つた。門限遅刻は保証人連署の届書を要し、午後十時以後は一切歸舎することを許されなかつた。その門限遅刻の届書と點檢欠席の届書とは室長が集めて置けば小使が取りに来居つた。臨時外出願は保証人の印を要するから保証人の印が無い時は一先つ學寮に届出で、出門証を受取つて歸つた後で保証人の印のある願書を出し居つた。要するに今よりも煩雜で嚴重であつた。尙ほ長途行軍の話、賤の男太卷の話、人圓主義の話など書きたいけれども余り長くなつたからこれで御免を被むる。

大石道に横ばるあらば懦者は見て行路の

障碍とし勇者以て進歩の階梯とせむ

(カトウイロ)